

## 「聞く・聞こえる」の言語学

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/7018">http://hdl.handle.net/10291/7018</a>

# 「聞く・聞こえる」の言語学

中村 幸一

印欧語では古代以来「聞く」と「聞こえる」を、別語根の語として峻別することがある。日本語の場合も、*kik-u*, *kik-oy-u*と語根 *kik-*を共有している。後者は、「聞かゆ」からの変化だとすると、前者に、自動詞化の働きを持つ拡張要素 *-oy-* (*-A-ay-*) を付加した二次的発生である。一方、希 *akroto-u*, *akpoaoxoi* 羅 *audire*, *auscultare*, リトニア *girdeti*, *klausyti* (s), サンスクリット *śru*, *śṅṅus-*, 古アヴェスター *śru-*, *gaos-* (≡ 新アヴェスター *gaōša-*) が語根を共有しない言語のペアである。

ゴート語は *hausjan* 「聞こえる」しかもたないが、新約聖書では *ga-hausjan*, *and-hausjan* というように接頭辞によって、希 *akroto* のニュアンスの違いを訳し分けられている。同じことは古代教会スラヴについても言える。

(*po-slušati*, *u-slyšati* 等)。*slyšati*, *slušati* は日本語のように、同語根からなるペアであるが、接尾辞ではなく、母音交替によって意味を分化させている。サンスクリットの「聞く」*śru-* は接頭辞による特化である。

希 *klyō* 教会スラヴ *slyšati*, *slušati* サンスクリット *śru-* アヴェスター *śru-* また、トカラ A *klots*, B *klotso* 「耳」は、広い分布を示す印欧祖語 *\*kleu-* に遡る。一見すると意味的に困難だが、面白いのは、ヒッタイト *išamas-* 「私は聞く」である。これは「耳」*išaman(a)-* と形態論的に同じだが、希 *otolō* アヴェスター *staman-* 「口」と古くから同根とされていて、今でも論議を呼びながら、覆されていない。耳も口も人体の穴である、という共通点があるからである。同じアナトリア語派の楔形文字ルウィ語では、*tummaniti* (ia) 「聞く」、象形文字

ルウィ語 \**tumanti(ia)*-(AUDIRE + *Mti-ta*) である。さて、有名な『ハットウシリ三世の弁明』の冒頭(一・五―八)からヒットタイトの用例を引こう。これは王位を篡奪したのではないか、という疑いに対する史的な経緯を説明したものであるから、子々孫々耳に入れてくれ、という願いは熾烈であったと思われる――

イシュタル神の思いやりある導きを私は語ろう。これをすべての者が聞かんことを *na-at DUMU.NAM. LU.UL.LU. as is-ta-ma-as-du so*、将来「わが太陽(＝王)」たる息子、孫、それに続く「私の太陽」たる子孫たちが、イシュタル神の神々のものと、互いに畏敬の念をもたんことを。

これは世俗文書であるが、「聞く」ことと宗教とは深い関係がある。祝詞でも「聞こしめせと(聞食止登)申す(宜る)」という表現が多いであろう。神々に聞いてもらいたい、という定型句が印欧語でも頻出する。一例として、ムルシリ二世の疫病への祈りから、切実な言葉を引こう。父シュッピルリウマ一世の時代から続く疫病を静めて欲しいのだが、神託によると、暴風雨神の祟りらし

い、という――

今、我が主である暴風雨の神に対して、疫病(消除)の祈りを申し上げます。私(の祈り)を、我が主、ハッティの暴風雨神よ、聞き給え *DIM URUHa-at-ti EN.ZA is-ta-ma-as*……鳥が巢に戻れば、その巢が鳥を癒します。あるいは、従僕が反省し、主人に許しを請うとき、主人はその言うことを聞き、 *na-an EN.SU is-ta-ma-as-zi* 従僕は温情を得るのです。

また、ヒットタイトのパンテオンには、耳を貸してくれる者、として、*Dīšamanasas* という神がいる。

近接するイラン語派より「聞く」と「聞こえる」が並列して用いられている例を、『ヤスナ』のザラスシュストラの韻文よりひこう――

我は言挙げせん。近くから来るものも遠くから来るものも耳を傾けて聞け *nū gūšōdum nū sraotā*。光明に溢れることを、よく考えよ。邪な教義の者が、その不信心と舌の災に導かれて、二度とわれわれの世界を壊さないことを。(四十五・一)

このことを良き心で人に聞かせよ *saoti* 賢き方よ。真実ともに聞かせよ *saoti*。アフラよ、耳を傾けよ *gushnuā*。どの部族、どの家が、汝の掟を守り、社会に榮譽をもたらすであらうか。(四十九・七)

*gūšōdum, gūšānuā* は 古アヴェスター *gaos-* の命令法であるが、サンスクリット *ghos-* 「鳴る」と、音韻論的に無理なく同根である (*Ilr. \*ghās-*)。ただし、意味は逆にずれている。 *stu* の派生語 *stosa* 「従順」はザラスシュトラの『ガーサー』では、普通名詞として数回現れるだけだが、新アヴェスターでは *Stosa* として神となっている。闇の力と戦い、怒りの難敵となっており『ヤスナ』五十七全体が、このスラオシャへの讃歌である。さて、隣のインドへ目を移すと『リグ・ヴェーダ』一・十・九その他において帝釈天インドラは、鋭き耳を持つ、と言われている――

耳鋭き方よ 勸請を聞き給え *śrutakarna śrudhi*、我が讃歌を受け入れたまえ。インドラよ、この我が讃歌を同胞よりも近しくし給え。

「聞く・聞こえる」の言語学

火天アグニにも同じ所有複合語が用いられる――

「万人に見え、正しき水牛たるアグニを人々は恩寵を求めて高きところへ置きたり。聞く耳を持ち *śrūtkarāni* この上なく大きく、神のごとく、讃歌によって人は昔から汝を(このように)処遇したり)。」

(十・一四〇・六)

ギリシャで神へ訴える場面は数えきれないが、『イーリアス』より、パトロクロスの火葬の後、葬送競技に出たオデュッセウスの台詞をひこう。アキレウスが提示した賞品は、一位が、精巧な細工をした銀製の混酒器、二位が、牛まるごと一頭であるから、みんな必死で走るのも当然である――

アカイア人たちは皆オデュッセウスが勝利を目指して走るのを見て声をあげ、全力疾走する彼に声援を送った。最終コースにかかったとたんオデュッセウスは、輝く目のアテーナイエーに心の中で祈った――「女神よ、お聞きください *Klōs, Dea* わが両脚によき助けをお与えください。」(二十三・七六六―七七

○)

さて、絶対に聞いてはいけないのが、セイレーンの声である。魔法の女神キルケーが、オデュッセウスに、部下たちの耳へ蠟を入れてそれを聞かせず、彼自身は、体を船のマストへ縛りつける、という知恵を授けたのは有名である。セイレーンの誘惑―

「オデュッセウスよ、船を留めて、私たち二人の声をお聞きなさい *ὄν ακούωσς*。私たちの口から、蜜のごとく甘い言葉を聞かずに *ἦβιν* ∴ *ὄν ακούωσται*、黒い船でここを漕ぎ去ったものは未だいないのですよ……」美しい声を発してこう話すと、私は聞きたくてたまらない気持ちになり *ἦβει ακούσθηναι*、仲間たちに私を解き放つよう命じた。『オデュッセイア』十二・一八四―一九三)

ここに三回用いられている *akouōs* であるが、*ō* を「一」ないし「中」の意味の接頭辞 (\**sq̄*, \**en*)、あるいは単なる添頭音と見る説もあったが、喉頭音 *h₂* とみるのが (\**h₂kouōs*) 今は妥当である。いずれにしても、ゴート

語 *hausjan* と同根であることは動かない。さて、まれな例だが、神々には、聞いてくれるな、と頼むこともある。エウリーピデース『ヒッポリュトス』において、彼は恋愛に興味がなく、狩猟三昧の生活を送る。愛の女神アプロディーテーに冷淡な態度をとることで、罰せられるわけであるが、それを予期するかのようによろしく心配する―

われわれにはあんな考え方をする若者たちの真似はできませんぬわい。下僕に相応しい言葉で、貴女の像にむかってお祈り申し上げます、キュプリス様。お許しいただかなくてはなりません。若気の至りで、極端な考え、罰当たりなことを口にしますが、それは聞かなかったことにしてください *ἦν δόκει τοῦτον κλέβειν*。神さまは人間より思慮深くいらっしゃらなくてはなりませんぬ。(一一四―一二〇)

さて、聞こえるような気がする、いやたしかに聞こえる、ということがある。ホラーティウス『歌集』三・四

おゝカリオペーよ、王女よ、天より降り来て、長き歌を、さあ笛にのせて歌ってください。いえ、よろしければ、今日は、貴女のお声だけでも、あるいは、アポローンの堅琴の音にのせて。(その歌が)聞こえているだろうか *auditis?* いや、甘美な狂気が私をからかっているのか。いや、私には聞こえるような気がする *audire et uideor* そして、聖なる森をさまよっているのだろうか。その下を心地よい水とそよ風が流れているではないか。(二一八)

最後に、「聞く」をやや逸脱して「聞き耳をたてる」例をセネカ『精神の平和について』から引くことにする。明らかにこの行為は心を乱すものであるう—

明け方になると何もすることがない者さえ出かけてゆく。そして、多くの戸口で押し返されどうにもならず、来客係に挨拶して回り、追り返されてばかりいて、ふと気づくのだ。家に一番居ないのは、他ならぬ自分ではないか、と。こういう悪癖から、最も忌避すべき悪事、すなわち、盗み聞き *auscultatio* をしたり、公のことや秘密をわざわざ調べたり、語

るのも聞くのも *audiantur* 危険なことを多く知ろうとする者がでてくるのだ。(十二・六一七)